



考
え
マ
シ
カ

第
一回 『侍タイムスリッパー』と
『国宝』

ヒトか？ 人間か？

いや、ウマシカ。

弦楽器イルカ  ⇔ 友人

目次

第八十八回『侍タイムスリッパ』と『国宝』～UからGへ～	1
第八十八回『侍タイムスリッパ』と『国宝』～GからUへ～	4
第八十八回『侍タイムスリッパ』と『国宝』～UからGへ～	9
第八十八回『侍タイムスリッパ』と『国宝』～GからUへ～	11

第八十八回『侍タイムスリッパ』と『国宝』～UからGへ～

読んだよ。出川の功罪とは、なかなかの分析だと思う。彼が強メンタルすぎるのは確かで、真似できそうで真似できないのが彼の芸の領域だからね。さんまさんが言うように「アホ、出川は一流や」が彼を一番よく表した言葉だと思う。だからこそ罪深いのか。

最近見たテレビ番組で圧倒的に面白かったのは、フジテレビの記者会見だった。絵としてはおっさん達が写ってるだけだけど、どんなニュースよりも今の日本を映していると思ったし、さすが面白くなければテレビでないというフジテレビはわかっている。守る大企業の役員の狡猾な回答、攻める謎のフリーランス記者たち、どんなハプニングが起きるのか、そもそもこのまま逃げ切られるのか、世紀の真剣勝負には引き込まれたよ。CM無しの10時間ぶっ続けは浅間山荘事件以来か。

面白いものは予定調和を超えたところにある。視聴者は安全な位置から猛獣から逃げる芸人を笑い、賢者の位置からコメントイターにツッコミを入れ、美男美女のごとくドラマに入り込むのが好きだ。ギリシア、ローマ時代から変わらぬではないか。コロッセオで戦士が、劇場で役者が、広場で弁論家が見せてきたことと同じだ。問題はコンプライアンス重視という社会と合わなくなったことだ。個人にはコンプライアンスは存在しないので、面白いことが自由にできるYouTuberに持っていかれた。これからテレビが生き残るには、ラジオに近いことをすれば良いと思う。すでに多くの人は、食事をしながらニュースやバラエティやドラマだって垂れ流しているかもしれない。BGMのように存在感を消せば、逆説的に存在価値を見出せるのではないだろうか？

中居君は一昔前の日本なら当たり前前のセクハラオヤジなだけだと感じた。これは時代の移り変わりだ

し、中居君やプロデューサーやフジテレビに押し付けるものではなく、日本全体とか世界全体の変化の話だと思った。

ひさしぶり。映画館で今話題の『国宝』を観た。歌舞伎役者の半生50年のフィクションんだけど非常に良かったよ。上映時間3時間と長時間の作品だが、それでも良かったと思えることについて考えた。

たまたまだが直前に、新書の『映画を早送りして観る人たち』を読んだ。映画を早送りして観るというのは、映画館でなくてサブスクの動画サービスの話なんだが、タイパ重視のZ世代は当たり前前に映画を倍速で見られるらしい。「Eikō」のようなりコメントプッシュのクルクル動画に慣れてしまうと、映画作品を観る時も「早く結果を教えろ」という状態になるみたいだ。いや、俺も「Eikō」中毒者の一人ではあるんだが、さすがに映画は早送りしない。

そもそも映画もドラマも結果を知りたいから見るという感覚がわからない。結果なんか調べれば出てくるじゃんか、結果じゃないんだよ！ と思っていたが『映画を早送り』によるとネタバレを読んでから何を観るか決める人も最近多いらしい。犯人がヤスである事を調べてからポトピア連続殺人事件をやるような物だ。ここまで書いて、その気持ちは分からんではなかった。俺も犯人がヤスだと知っていながらクリアした一人だし。

いやいや、最近は若者もそうでない人も、耐久力とか持久力が低下して、早く刺激的な映像を見せろや！ という、パンとサーカスならぬ「エナジードリンクと動画サイト」状態なんだろう。

そんな中、3時間の映画というのはなかなかチャレンジングだったろうし、意図的にそうしたと思っ

ている。映画館で入場を待っている時にも、周りの話して、3時間長いよねとか、終わったなら12時（夜の）近いよねーとか聞こえた。

実際に観終わって、正直、3時間があつという間だったとは思わなかったし、少し長く感じたのも確かだ。ただ、観終わったあとと真っ先に思ったのは「それも含めてのこの作品だ」ということ。一人の人生を作品で表現するのに、2時間だろうと3時間だろうと短いには違いはないはずだ。しかし、人生が長いようで短いということを追体験させるには、ちょうど良い仕掛けのひとつになったと思う。もしかしたら監督はそこまで意図していないかもしれないが、『映画をく』を読んだ俺はそんな事を思ったよ。

とにかく結果を知るための映画ではなく、体験をするための映画であり、5秒の無言のシーンにはその意図や意味がある。映画を早送りしてはいけないことを思い知らせるような、良い作品だった。日本映画を代表する一本になると思う。

侍タイムスリッパは確か「NEXT」にあったから見てみるわ。そんなに面白いのか。

侍タイムスリッパを観たよ。まあ、面白かったし笑わせてもらったが、国宝と比較する事はできないね。国宝はマジで魂をスクリーンに奪われるし、事実、2時間くらい飲み物飲むのを忘れたわ。

主演の吉沢亮と横浜流星は多分、本物の歌舞伎役者より歌舞伎役者だと思う。YouTubeで本物の歌舞伎を見て見たら、迫力が違うし物足りなさ半端なかった。それくらい国宝はすごいよ。



第八十八回 『侍タイムスリッパ』と『国宝』くGからUへく

返信が遅れすぎてて申し訳ない。熱いレビューをありがとう。『国宝』人気だよな。

同じ監督のデビュー作『青chong』が俺は好きで、『フラガール』も良かったから、観れたら観ようとは思うよ。

とりあえず、歌舞伎は本物の舞台、映画はスクリーンで観ないことには、あらずじはわかってる迫力が足りないだろうとは言っとく。

『侍タイムスリッパ』の殺陣を劇場で観れなかったのは、ちょっと惜しいことしたと思う。どのくらい惜しいかと言うと、今俺が漫画『国宝』一卷を無料で試読して、「なるへそ」って思ったくらいもったいないと思う。

わかりやすく例えようと思ってわざと読了したけど、俺がここから映画『国宝』をマジ論評したら、さすがに違うと思うでしょ。

とはいえ、俺にとっては国を代表する作品かどうかは、全く重要じゃないよ。

例えば、国を代表する某漫画より、俺は今『路傍のフジイ』とか『二階堂地獄ゴルフ』が好きだ。世界24都市25公演でソールドアウトした某アーティストも立派だとは思うけど、たまたま観たタイやアルゼンチンのバンドの方が断然好き。

とはいえ、俺も『侍』は同じインディ映画『カメ止め』みたいに、海外で受ける日本の代表作じゃないかと思うけどね。

俺は生き方や思考に影響を与える表現が観たいし、なんなら全く何の事件も起こらないし解決する謎も何一つないけど何故か面白いって物語が、極論すれば理想だと思ってる。(たとえば寺地はるな『いつか月夜』とか)

だって、謎や事件やイケメンに頼るだけの思考がないエンタメなら、俺にとっては観ても観なくても一緒だから。何にも起こらないのに俺の人生に事件を起こす物語があったなら、その理由を考えずにはいられない。そういう物語についてこれまでもいろいろ書いてきた。

昔は情報を取取りしてる優越感もあったけど、今はネット時代で情報通も多いから、自分が好きなモノをなぜ好きか、逆になぜ好きになれないのか、理由を考えることに意味があると思ってる。

というワケで、人間とヒトについて考えたんだけど。

人間て言葉はもともと仏教語らしいけど、人間って概念はいわゆる共同幻想で、この世界には生物と

しての（ヒト科ヒト族）ヒトしか実在しない。そのヒトとヒトが社会を形成する際、ヒトは人間になることを求められる、と考えた。

だからヒトとヒトの間にある幻の「人間」とは、社会に参加するために皆さんのルールを受け入れた「ヒト」の振る舞いであり、表現の一種だ。

社会生活を営む上で、ヒトが受け入れるべき制約は無数にあるけど、特に重要なルールとして、「社会に対する責任感」と、「ルールを破った際の罪悪感を持つこと」があると考えた。

無責任な振る舞いは社会にとって有害な場合がある。

また、「原罪」をヒトに科す宗教を利用し、罪悪感を常に持たせることで自分の中の悪を意識させ、悪を行わないようヒトを管理する国や社会もある。

だから、ここではあえて「罪悪系」という造語を使うけど、罪悪系な振る舞いで耳目を引き金を稼ぐ行為は、「社会的な人間」から「毛のない猿Ⅱヒト」に戻ろうとする振る舞いだ。

つまり、無責任かつ罪悪感を持たないヒトの集団は、平和で発展的な社会を形成できないし、できたとしてもその社会を維持できないだろう。

ただ、現在、様々な理由で、人間からヒトに戻ろうとする流れがあると考ええる。

もしくは、より多様性を重視した「ポリコレ人間」と、自分以外はモブだと思っている「超ヒト」との二極化が進んでいる。（昔から人間とヒトの間で様々な葛藤はあっただろうけど、その間隔が開いてより混乱している可能性がある）

もちろん、社会側から考えたら本当は、人間の寿命は50歳くらいがちょうど良くて、新陳代謝が起これにくい成熟すぎた社会が老化して動脈硬化を起こしている、世界中にたくさん事例もあるだろう。さらに毎度の同じ結論として、ヒッターなヒトが世紀末よろしくヒッター社会を望み、それで文明や人類が減んでも、虫は生き残るから地球や遺伝子は安心、と極論もしく。

しかし、人間であることをやめようとするヒトのムーブに対して、現代社会はあまりに無防備かつ無策で、その流れに気づいてすらいない。当然、危機感など持ちようもない。

適量の罪悪感と責任感をヒトに持たせないと、いずれ人間社会を維持するのが難しい局面が現れると思う。（SNSで叩いて罪悪感を煽るやり方は過剰で、反発や争うことへの罪悪感がお互いなくなるから、むしろ逆効果だろう）

ここ、つまらないウマシカ予言シリーズね。7月5日ですけど何か？

セレブ女性たちの乳首開放ムーブも今後どうなるのかニュースをよく読むんだけど、人間として一段上のステージに立つ振る舞いなのか、それともヒトに戻るための振る舞いなのか、興味がある。

責任感と罪悪感の両輪で、社会が抱える荷物をみんなで引っ張るのが個人主義の理想だと思っただけど、

すでに自分本位の個人主義だけが行き過ぎかけてる。

「社会の全員が自分の得を優先すれば、結局全員が少しずつ得するはず」ってねずみ講みたいな屁理屈を言い訳にして、自分の得だけを優先する生き方に罪悪感を感じないヒトが増えれば、他者への共感や関心は減り、格差は拡大し、かつて人間であった人々も、いずれヒトに戻らないと生き残れない社会になっていく。

という電波を、俺は『侍タイムスリッパー』から受け取った。

『侍』が少し変わっているのは、タイトルの時点で不安になるくらいコテコテのコメディだから、昔の人が現代にやってきたら時代のギャップから変なこととしてそれを笑う、くらいの作品なのかと油断させといて、「申し訳が立たない」というセリフと、「為すべきことを為す」というセリフの重みについて、説明せずに観客にぶん投げたってとこだ。

『侍』は争いのある昔よりも平和な現代の方がいいという話では絶対じゃない。

むしろ、「殺し合いにも意味があって、命よりも先に誇りがあるのが侍だ」と考える人間が、この世で最も大事なものは（建前上でも）人命という現代社会で葛藤し、生きる意味を模索する話だ。

ただし侍とは言っても、「人をほとんど斬ったことがないある程度平和な時代から来た」という設定が、後々大きな意味を持つてくる。

タイムスリッパーってバカバカしい言葉の響きも含めた荒唐無稽さに引っ張られて、終盤命がけの殺陣を唐突だと思ふなら、ちょっと残念なヒトだと思ふよ。

「申し訳が立たない」という罪悪感と責任感を持った人間が、命よりも前にあるもののために、殺し合いをする。80年代、時代劇撮影中の殺陣で真剣を使用し、本当に首を斬り殺された騒動が頭をよぎるような展開だ。

命より前に何があるのか。本当にそれはあるのか。二人は刀を交えながら自問自答する。

その答えは、「為すべきことを為す」だ。

時代に翻弄され、価値観は揺らぎ、生きる意味を見出せずとも、為すべきことを見つけ、命がけで為すだけ。それがヒトではない人間の生き様だ。

さて、デビュー作『青』は劇場で観てすごく良かったけど、『国宝』もこういう気づきを与えてくれんのかね。繰り返すけど、単に極道や歌舞伎やイケメンに頼るだけの普通のエンタメなら、ウマシカな俺は許さないよ。東野と佐久間さんがべた褒めするエンタメに俺は半信半疑だから、『ルックバック』も漫画までで、映画は観なかった。（ウマシカのくせに生意気だけど）人の死がピークになるエンタメはそこまで好きじゃない。

でもエンタメのためにエンタメを消費する社会って、自分のために自分を消費する自分しかない個

人主義がはびこる社会だと俺は思う。社会の変化を全く希求しないエンタメなら、「自分の足でも食って
ろよ、ヒト」と少し思うんだよね。

わずかでもいいから社会の変化を希求する表現や文化が大事だと思うし、おかしい犯罪や事件が多い
のは、人間のヒト化を文化が防げていないからだろう。

そう考えたらBDでも虎でも納得せざるを得ない。今回はこんな感じ。
どうかな？



第八十八回 『侍タイムスリッパ』と『国宝』くUからGへく

読んだよ。

という電波を、俺は『侍タイムスリッパ』から受け取った。

の一文で流石にぶっ飛んでるなーとは思った。だが、言ってる事は分かる。そんなわかりにくい事は言っていないね。

『侍く』は寄生獣とテーマが似てるね。時代の違いなのか種の違いなのかはあるが、当たり前前の人間から一步離れるところから、生きるということの濃密さを描いているね。

『国宝』はイケメン頼りの映画ではないよ。監督は最初から歌舞伎役者を使うつもりはなかったらしい。歌舞伎を演じることの難しさは重々承知の上で、歌舞伎役者ではない役者を使ってる。『国宝』には人間国宝が2人出てくるんだけど、主人公でない最初の一人は老人で女方ということもあり、気色悪さというか、不気味なオーラが半端ない。畏怖されるような存在感であり、見事な怪演だった。その演技を見るだけでも十分に価値があると思う。



第八十八回『侍タイムスリッパー』と『国宝』くGからUへく

『国宝』を観たよ！

確かに日本を代表する映画だと思った。今年の日本アカデミーを総ナメするだろうね。それだけの予算がかかっているし、国宝ならぬ東宝の後光もある。

俺は同じ監督の『青』がすごく好きだから、さすがに省略が上手だなと思ったよ。漫画にある無用な説明や人物もちゃんと省かれてた。

とはいえ漫画にもいいところあった。特に最初の人間国宝の歌舞伎部分は、明らかに漫画の方が良かった。映画では音楽が大きすぎたし変なエフェクトもかかってた。人間国宝だけどダンサーだからなのか、無音で歌舞伎だけ撮るって演出ではなかった。

高畑充希の役どころがすごく面白くて、蛙化現象半端ないと思った。「結婚しよう」でむしろ身を引く覚悟をして、「いや、やっぱりいいや」って虚勢張る男に母性本能くすぐられるって。そこリアルで面白かった。もちろん、主演二人の演技も見事で、予算もキャストも脚本も監督が完全にコントロールした、素晴らしい映画だと思う。

でも、だからこそ、Uは本当に惜しいことしたよ。俺からしたら、『国宝』と『侍』は予想以上に似た構成だった。

それぞれ、映画や歌舞伎という表現の裏側を描いている。中盤、酔っぱらいの暴漢に襲われる重要な転換点がある。終盤、主人公が最も大切なライバルの首に、刃を突き立てる。

そしてなにより、題材にした時代劇や歌舞伎そのものよりも、その裏側をこの上なくカッコいいフィクションとして描くことで、本物より面白い可能性がある。

もちろん、笑いが一個もない『国宝』の格式高さと比べたら、『侍』のゆるさは目立つかもしれない。でもそんなガワに気を取られて、比較できないって結論付けるのは早すぎるけど、Uがこの二作を比較できない謎も全て解けたので解きますが何か？

侍二人が対峙するあの時間、観客もまた巨大なスクリーンと対峙しながら絶対に音を立ててはいけなないと、文字通り固唾をのんでスクリーンを見守った。あの緊張感こそ、真骨頂だった。

『国宝』と『侍』は、どちらも劇場で観てこそ初めて真価を發揮する、日本を代表する映画だと思うし、劇場で二作品を観てなければ当然、比較できるワケもない。

さらに『侍』は低予算でもたくさんの情熱に支えられて、日本アカデミーの作品賞を受賞した。制

作過程から受賞まで含めて感動する作品だし、そこはまさに『国宝』とは比較できない。

だって予算かけた面白い東宝映画ならアカデミー獲って当然って、それこそたけしも言ってる暗黙の慣習だしね。

今回のウマシカ最後の伏線回収だけど、「人間」になるためのルールを守れない、もしくはルールがあることさえ知らない「ヒト」が、我慢も思考もできずに時短で結末だけを求めるのは、時代の必然だね。今回『侍』をネットで調べ直したら、AIがまとめたであろう結末まで全あらずじが詳細に載ってた。ちょっと前まではさすがにここまで無料で知ることではできなかったけど、今や数分で結末まで知れるんだから、そりゃヒトならそうするよ。

ただし、緊張するのが苦手だから結末を知って安心してから観るとか、それは本人の自由だと俺は思うよ。PKダメとか、ドッキリダメとか、いろいろあるしね。

ただ、俺は『すずめ』の回で正論を書いたと思うけど、劇場で観てないから脚本のあら以外は語るべきでないと改めて思ったかな。

ああ、書ききった。今回はこんな感じ。どうか？



考えるウマシカ～ 第八十八回 『侍タイムスリッパ』と『国宝』～

著 者 弦楽器イルカ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
